

## 存在と言葉

現前するもの das Anwesende と現前すること Erscheinend についての試論

佐藤 幸三

### 序

世界における出来事はすべて「私」に対する現象であり、現象を与えている、一般に本質と呼ばれているものは不可視とされている。それは、古くは、プラトン、アリストテレスがそれぞれイデア、形相として、また、近代では、I. カントが物自体として定立し、さらには経験されないものの存在を認めない経験主義者の J. ロックでさえ実体<sup>1</sup>として想定せざるをえなかったものであり、本来的に形而上学の対象となるべきものであるが、M. ハイデガーはそれが存在の真理を問わずに存在者の考察に留まっていると批判しながら、諸々の存在者の根拠を「存在<sup>ザイン</sup>」と名づけ、その考察を彼の思想の中枢を成す論点とした<sup>2</sup>。彼にとって存在を問うことは具体的な存在者を超えて、それを有らしめている存在<sup>ザイン</sup>を問うことである。ところで、事態が現実的であるとされる有力な根拠の一つは、それが「《現在》において有る」ということに依る。なぜなら、事態は、「私」に対して、現在という時点にあってこそ最もリアルに映るからである。本小論ではハイデガー哲学で「性起 Ereignis」と名づけられた「存在<sup>ザイン</sup>の開け」という現象を現在という時制における現象として分析し、その現象をもたらしているとされる存在<sup>ザイン</sup>とその働きについて、主に言葉に着目してその真実性を解き明かすことを目的とする。

### 一、ハイデガー哲学における「存在の開示」理論の確認

ハイデガー哲学においては、個々の具体的な対象である存在者とその根拠としての存在<sup>ザイン</sup>は原初的に同一的なものとしてあり、存在<sup>ザイン</sup>は存在者として顕現するが、他方、存在<sup>ザイン</sup>は伏蔵態 *Verborgenheit* という性格を持ち、まったき存在者として開示されることはないといわれる。つまり、存在<sup>ザイン</sup>は存在者へと顕現しつつ、自らを退け、伏蔵する。存在<sup>ザイン</sup>が自ら退くことは「無化 *Nichten*」と命名された。したがって、存在<sup>ザイン</sup>と存在者の間には

「無」という帳が介在し、<sup>ダーザイン</sup>現存在<sup>3</sup>の側からすれば、<sup>ザイン</sup>存在は無として映る。

<sup>ザイン</sup>存在が自らを退ける事態を無化と名づけるなら、<sup>ザイン</sup>存在は何がしかの仕方<sup>ザイン</sup>で無と協働しているということになるが<sup>4</sup>、こうした事態について素朴な疑問として生じるのは、有としての性格を持つ<sup>ザイン</sup>存在と無という本来は矛盾する関係にあるものがいかに互いに関係し働きあっているか、である。およそ科学的理論は矛盾を排除した整合性において成立するという<sup>ザイン</sup>ことは、とくに西洋世界では自明のこととなっている。ハイデガー哲学における<sup>ザイン</sup>存在と無の関係は、はたして無矛盾的と言えるのだろうか。両者の関係は<sup>ザイン</sup>存在の働きを見極めることによって明らかにされるのだろうか。

<sup>ザイン</sup>存在の働きを解明するにあたって、その鍵の一つとされているのが言葉である。通常、私たちは、言葉は意味を伴って、人によって発せられ、人によって理解されると考えている。ところが、ハイデガーは、言葉は<sup>ザイン</sup>存在の働きとして予め人からは独立して有り、<sup>ダーザイン</sup>現存在に語りかけると言う。世俗智をもってしては経験できない、こうした現象を私たちはいかに理解すべきか。その手がかりとして、初めに事象、事物等々を現実的なものと特徴づける「現在」について考察する。

## 二、「現在」における現象を超えて、それを可能にするものとしての<sup>ザイン</sup>存在について

「現在」、「今」と言うとき、通常、我々は流れゆく時間において唯一感覚的に触れることのできるそのつどの一刹那を思い浮かべる。ハイデガーと同じく現象学者で、彼の師でもあるフッサールは時間論で現在を「生きた現在 *lebendige Gegenwart*」として主題化し、現在とはそのつどの尖端の部位 *Endglied* であり (vgl., *Husserliana*, Bd. X, Nijhoff, HAAG, 1966, S. 175, 以下、*Husserliana* からの引用は *Hua.*と表記する)、それは人間の意識にとっては「今が成す系列というなかでのそのつどの頂点 *Kulminationspunkt*」(ibid.) であり、「もっとも明瞭に見える点 *Punkt des deutlichsten Sehens*」(id., S. 176) である、と述べている。

性起と呼ばれる、すなわち、<sup>ザイン</sup>存在が存在者へと向けて顕現しつつ、無化し退く *entziehen* という現象は現在という時間的場所における現象である。「現在の *gegegenwärtig*」は、「不伏蔵態という空け開かれた対域 *Gegend*」(*Holzwege*, Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., 1957, S. 319, 邦訳、『杣径』、創文社、東京、1988年、387頁)を指し示している。フッサール哲学を視点とすれば、性起という現象が生じる刹

那のみが現在における事象ということになるが、性起は性起せんとするものがあって初めて可能となる現象であり、ハイデガーは性起へと向かいつつ待機しているものを「現前するもの *das Anwesende*」と呼んで現在の範疇に含めた<sup>5</sup>。「現前するものは、その都度暫時の間のもの *Das Anwesende ist das Je-weilige*」<sup>6</sup> (id., S. 323, 邦訳, 391 頁) として現在に住まい、由来と立ち去りの中に暫時の間留まるとされる。しかし、他方、現前するものは現在的でありながら、非現在的に現前するものをも指示していて、その視点に立てば、後者は非現前 *Abwesende* である (id., S. 322, 邦訳, 390 頁参照) とも述べられている。それゆえ、「現前するもの」は「現在」のうちにはあるものの、そのなかで時間的延長という性格を持つと推量される。フッサールは現在を刹那的なものとしたが、そこに「延長」という性格を付与することがいかなる意味を持つのだろうか。ハイデガー哲学における「現前するもの」、「すでに到達しているもの *Beigekommen*」 (id., S. 319, 邦訳, 387 頁) は、おそらくはフッサール哲学に照らしてみれば「まだない *noch nicht*」、「もはやない *nicht mehr*」 (vgl., *Hua. Bd. X, S. 372*) に該当し、どちらも生きた現在には含まれないと考えられる。

現在が現在を超えて非現在的な現前するものをも含有とするなら、存在<sup>ザイン</sup>は刹那的現在を超えて現在に介入し、作用を及ぼすということなのだろうか。ハイデガーの言う存在<sup>ザイン</sup>が、もし、フッサールが定義した「現在」を超えたものとしてあるとするなら、現在のみが可視的であるとする視点からは事象としては無として有としか言えなくなり、したがって「現前するもの」は経験可能な領域を超えた検証不可能なものであるということになる。

### 三、現前するもの *das Anwesende* と現前すること *Erscheinend*

「現前するもの」とともに性起を構成する事象の一つに「現前すること」がある。それは、「光の中への出現」、「明るみとしての顕現において性起すること」 (*Unterwegs zur Sprache*, Neske, Stuttgart, 1993, S. 134, 以下 US. と表記, 邦訳, 『言葉への途上』, 創文社, 1996 年, 160 頁) と語られていることから、まさに生きた現在において出現するその時、只今「出現すること」として性格づけられていて、「現前するもの」とともに現在に含まれる、と考えられる。では、現在という時点で出現することが存在<sup>ザイン</sup>にとって「現前すること」であるとするなら、同じく「現在」を共有する「現前するもの」

はいかに理解されるべきか、「現前すること」との比較において改めて問うことにする。

現在を共有しているとするなら、両者はその時点で重なり合っていると想像されるが、「日本人との対話」のなかで、「現前するもの」と「現前すること」という二重構造をただの区別として表象している限りは、その二重構造を直接経験することはできないと述べられている (vgl., US., S. 126, 邦訳、150 頁参照)。「現前するもの」と「現前すること」のどちらの側からも、また、両者の関連性からも説明されるものでもないと言うのである。両者を知るためには、存在が開かれる明るみの中に入ることによってしかなされないとされるので、そもそも性起が経験的世界を超えた事象であることに鑑み、その理解を推量によって試みることにする。

「現前するもの」は「現前すること」に反映して性起するので、結果として一体のものとして概観されるはずである。すなわち、性起が起こるとき、「現前するもの」と「現前すること」は協働して働いていると考えられる。しかし、現前する「もの」は、つまるところ現前する「こと」ではないがゆえに、「現前するもの」は「現前すること」に居合わせつつ、「現前すること」に拒否され、決して「現前すること」自体にとって代わることはできない。「現前するもの」は「現前すること」になりつつ、退く。「現前するとき」は「現前へと至ったもの」が凝集する場所 Ort の頂点としてあり<sup>7</sup>、「現前するもの」は出現を司る言葉である言<sup>ザイン</sup>の働きによって現前する時へと促される<sup>8</sup>。

「言う sagen」とは、ハイデガーにとって「露わにして見えるようにする (示しつつ見さしめる das zeigende Sehenlassen)」(US., S. 222, 邦訳、272 頁) ことである。言葉は「静寂の響き das Geläut der Stille」となって顕れる沈黙の時を耐え、その後、「只今 (生きた現在) という時において生起する。言葉は「現前するもの」と「現前すること」の両者にかかわり、前者を後者へと促す。「現前するもの」は「現前すること」と密接にかかわってはいるが、しかし語られないものであり、「現前すること」が言<sup>ザイン</sup>によって行われるのに対して「現前するもの」は沈黙として、すなわち無の様態としてあると考えられる<sup>9</sup>。現前したものの「現前すること」は凝集したものの性起として<sup>10</sup>、具体的には「言う sagen」働きとなって顕れる。「現前するもの」は、厳密に言えば、まだ言われてはいないもの Ungesagte、まだ示されていないもの noch nicht Gezeigte であり、「無 Nichts」の様態においてある。

具体的に性起を動機づける言葉は「Es (gibt...)<sup>ロゾス</sup>」<sup>11</sup>である、とされる。ハイデガーは、<sup>ヴォルト</sup>語の本質の中には、この与えるもの was gibt が蔵されている」(US., S. 193, 邦訳、232頁)と言いつつ、その根拠をドイツ語の Es gibt に求めている (vgl., id., S. 194, 邦訳、233頁参照)。Es が働くとき、「現前したもの」は語り始めると考えられる。しかし、そうした事態が真であるとしても、性起において十分に語られるということは不可能であると考えられる。なぜなら、刹那というごく短い時間において語る事が可能なのはまさに<sup>ザーグ</sup>言としての一語であり、おそらくは文という完成された形態を伴った語り Sprechen ではないからである。語られる時を待ちつつ語られないもの、すなわち、蓄積された言葉の群れは、Es ist...<sup>12</sup>としてあると考えられるのではないか。文(命題) S ist P は対象定立のための形式であり、「ist (有る)」は静態的な事態を表現している。一般に、音節と呼ばれる語を形成する最小単位でさえ、それが発せられる時は意味を予持して、最後に文として完結するとき全体としての意味を形成する。しかし、そのとき、言葉はすでに性起からは取りこぼされている。「現在するもの」は、まだ発せられてはいないが凝集しているという事態においてあるがゆえに S ist P として整いつつ、かつ「現前するとき」へと向けて待機して有ると推測される。「言葉についての対話より」では、<sup>ザーグ</sup>言の本質は Es ist からの訣別であると述べられているが (vgl., US., S. 154, 邦訳、187頁参照)、「現前するもの」は S ist P と形成されつつ、Es によって生起を促され、S ist...と出現し始めているのであり、その緊張が性起の現象として脈動していると想像される。「現前するもの」はまだ生起してはいないがために聴き取ることは不可能で、ひとには「静寂の響き」としてしか届けられないが、S ist P から、S ist...の移行という緊張が「響き」となって<sup>ダーザイン</sup>現存在へ届けられていると考えられる。

#### 四、「現前するもの」の出現

事態が生きた現在において最もリアルに有るとすれば、生きた言葉とは生きた現在において発せられる<sup>ザーグ</sup>言である。

もし言葉が「現前するもの」として凝集するとするならば、そこで集められた<sup>ヴォルト</sup>語の

総てが生きた現在において「現前すること」として出現することはありえない。刹那という時間の尖端にあっては、せいぜいそのうちの一語（音）が発せられるにすぎない。したがって、言<sup>ザーゲ</sup>として発せられる語<sup>ヴォルト</sup>がある一方で、その背後には出現せんとし、それでも「現前するもの」に留まらざるをえなかった語<sup>ヴォルト</sup>があると想像される。言葉の領域で性起が生じているということが真実であるとして、語<sup>ヴォルト</sup>の一部が表出しつつ残りは語られずに留まるという事態は性起の理にも適っているように思われる。言<sup>ザーゲ</sup>が存在の使者であるとするなら、そして、刹那における言<sup>ザーゲ</sup>の生起がせいぜい一語であるとするなら、現前するものは現前することに綴るがゆえに、凝集した言葉は発せられる一語に含意されて表出されるということになる。発せられる一語が発せられずに留まった言葉の全体を暗示として担っているとするなら言葉の全体は隠喩となって響くはずである。

ハイデガーは「詩において語られたものは本質的に語られざるものとしての詩を保護する」(US., S. 70, 邦訳, 78 頁) と言う。詩は事態の正確な描写を試みる散文に比べ、一般に短文で表現される。そして、場合によっては主語、述語を備えた文という形式すら取らない語句、もしくは語句の集まりで事態を散文より深く描写するという点において詩的隠喩は散文に勝る<sup>13</sup>。しかし、詩的隠喩にたとえ言外の領域にまで言及する働きがあるにしても、感覚からは閉ざされている言<sup>ザーゲ</sup>の内奥を開くような能力まで秘められているのだろうか。

一般に、表現された詩が詩人から離れて作品として存立するとき、詩はつまるところ主観的に解釈することが運命づけられている。「認知意味論」を展開したレイコフは、「詩とは作者の手を離れれば、それ自体で成り立つものである。それはわれわれの解釈を喚起し、作者のとり方と一致しようとしまいと、価値をもつのはそれぞれの解釈の方なのである」(J. レイコフ著、大堀俊夫訳、『詩と認知』、紀伊国屋書店、東京、1994 年、121 頁) と述べて、詩的隠喩が語り手ではなく、むしろ受け手において意味をもつことにその本質的性格を認めている。また、隠喩は概念を表示し、隠喩から生じる概念的な写像は経験的な価値をもち、経験的な検証や反証を受けると述べている(同書、120, 148 頁参照)。もし隠喩がつまるところ経験的にしか把捉、解釈されえないとするなら、経験世界の彼岸にある存在<sup>ザイン</sup>の性起は詩的言語を手段としては開明

できないということになる。経験を拠り所としていては、たとえ詩に基づいて<sup>ザイン</sup>存在を捉えたにしても主観的解釈に基づく恣意的なものになりかねない。

詩的隠喩を手段として性起という現象を読み開くことは果たして可能なのか。ハイデガーは、ヘルダーリンの詩を取り上げながら「冷静に思索しつつ、彼の詩において語られているものの中で、語られていないことを経験するというのが、唯一必要であろうし、また必要なのである」(Holzwege, S. 252, 邦訳、302頁)と述べているが、語られていないものの経験は、未だ出現していない<sup>ヴォルト</sup>語を<sup>ザイン</sup>的とし、<sup>ザイン</sup>存在の思索によってのみ与えられるとされているので、世俗的世界における隠喩解釈では立ち行かないはずである。言葉は、ハイデガーにとっては「<sup>ザイン</sup>存在の意味への問い」としてのみ有意味であるとされているが、言葉に、もし、経験世界を超えるものを暗示するような意味が含まれているとするなら、その理解は通常の隠喩理解では及ばない。

## 五、<sup>ザイン</sup>存在と隠喩

もし<sup>ザイン</sup>存在それ自体が<sup>ダーザイン</sup>現存在に届けられないとすれば、そして、「すべての現われること、そしてすべての消えることは示す働きをする<sup>ザーグ</sup>言に基づいている」(US., S. 257, 邦訳、318頁)とするなら、<sup>ザイン</sup>存在は隠喩となって示されるはずである<sup>14</sup>。しかし、そこで表現される隠喩は具体的経験によって解釈される詩的隠喩とは異なる。<sup>ザイン</sup>存在が表す隠喩が経験的解釈を寄せ付けないことは、<sup>ザイン</sup>存在が経験的世界の彼岸に有ることにもよるが、それに加えて、おそらくは隠喩が経験的世界へと下降することで世俗化して凡庸な言葉となり、その本来的生命を失うからではないかと推察される。現前するとき<sup>ザーグ</sup>言によって、すなわち<sup>ダーザイン</sup>現存在からすれば隠喩として発せられた<sup>ヴォルト</sup>語は意味をしっかりと掴んだとき死んだ隠喩となる。もし、<sup>ヴォルト</sup>語が<sup>ザーグ</sup>言として発せられてはいるものの、まだまったき意味としては成立していない黎明のときに「<sup>ザイン</sup>存在」を開示せんとする隠喩の本質が宿るとするなら、隠喩を解き開かず手立てとなるのは混沌として<sup>おぼろ</sup>朧に霞んではいても、具体的な存在者となりつつあるものを具体的な真理へと溶き招く創造に

おいてであろう。ハイデガーは「詩作の本質は真理の創設 *Stiftung* である」(*Holzwege*, S. 62, 邦訳, 80 頁) と述べながら、贈ること、根拠づけること、始元させることを創設の具体的内容として挙げている。また、リクールは、言語的創造である意味作用の革新を起こすものは生きた隠喩であるとし、「真正の隠喩だけが、つまり生きた隠喩だけが、出来事であると同時に意味となる」(P. リクール、久米博訳、『生きた隠喩』、岩波書店、東京、1998 年、214 頁、『解釈の革新』、白水社、東京、1994 年、93 頁) と述べている。両者の弁には、発話の始原である言<sup>ザーグ</sup>にのみ生きた真理が宿るということが暗示されているように思われる。原初の意味が完成された意味の体系となって経験的解釈の対象となると、出来事は意味からは遊離し、そこではもはや「生きた意味」は色あせているはずである。

リクールは、また、「隠喩はこの類概念の形成を準備段階で不意に捉えることを可能にする」(『生きた隠喩』、249 頁) とも述べている。もし言<sup>ザーグ</sup>が発せられるときに何がしか「現前するもの」全体の意味を予期させているとするなら、語<sup>ヴォルト</sup>はそれが示す事態を呈示するために、必ずしもその事態の全体を言い尽くす必要はないということになる。言<sup>ザーグ</sup>が発せられる、そのときに事態が最もリアルな状態にあるとすれば、そして、もしハイデガーが語るころの「存在」<sup>ザイン</sup>が真に有るとするなら、それは生きた現在において発せられる言<sup>ザーグ</sup>においてこそ最も現実的であり、性起という事態の存在の可能性を最も強く呈示していると言えるのではないか。リクールが「隠喩は語の意味論にかかわるまえに、文の意味論に属している」(『解釈の革新』、117 頁) と述べているのに照らしてみれば、「現前するもの」は生きた現在において隠喩となって出現する「現前すること」にとっての文の意味論となる。先ほど引用した物言いに従うなら、「現減すること」は「現前するもの」を保護する。その意味では、隠喩を読み解くとは「未だ語られてはいないものに耳を傾け(聴従す)」(US., S. 262, 邦訳, 325 頁) ることで始まると言える。発話としての言<sup>ザーグ</sup>は決して無秩序に散逸するのではなく、発せられると同時に文脈に沿って意味全体を暗示している。隠喩は一語によって全体を呈示するという可能性を秘めているのである。

ところで、リクールは「意味論は、言語の現実への関係を主張することはできても、その関係そのものを考えることはできない」(『生きた隠喩』、395 頁) と述べている。



また、ハイデガーが「ロゴスという語は・・・言<sup>ザーグ</sup>と存在<sup>ザイン</sup>、語<sup>ヴォルト</sup>と物は、相互に隠された仕方、また、十分に熟慮されない、考え出されたとは言えない仕方

で帰属している」(US., S. 237, 邦訳、293頁)と述べていることから類推すれば、経験世界での意味の事物や事態との対応は任意の命名と指示関係に基づいていて、もともと必然的に成立していたわけではない。リクールは、また、隠喩的言表にあつては「述語機能の作動そのものが大切なのである」(『生きた隠喩』、118頁)と述べているが、隠喩的表現が文脈との緊張関係のうちで働きはするものの、主語については暗示するのみで、つまるところ、それが指示するものについては確定できないとすれば、隠喩は、結局は性起の主体である「存在<sup>ザイン</sup>」に達することはできないということになる。存在を主語とする隠喩は、言うなれば、「( )ist P」の形式においてある。一般に言葉と事態の紐帯を必然とする根拠を私たちは持たない。それゆえ、もし言<sup>ザーグ</sup>が存在<sup>ザイン</sup>の使者であるか、遡及して存在<sup>ザイン</sup>を問えるかとか問うなら、その真偽は判断(主辞・賓辞)を超えていると言わざるをえないと結論される。言葉はハイデガーが語る如く、存在<sup>ザイン</sup>の性起にかかわるのか、あるいは、経験世界において任意に創造されたものなのか、それを判別する検証可能な根拠を私たちは持ち合わせていない。私たちは認識しえないものについては沈黙せざるをえない。元来、「有る」には実体が無く、したがって、言葉による明確な指示は不可能である。それゆえ、「有る」を語る隠喩そのものにもその存在を証明するための根拠は宿らない。真理は依然として闇の中である。

## 六、存在と無

存在と無の関係について、『形而上学入門』では「存在に対する他者とは無だけである」(*Einführung in die Metaphysik*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1953, S.60, 邦訳、『形而上学入門』、理想社、東京、1973年、102頁)と語られている。つまり、両者はまったく相容れないものとされている。しかし、同書では、「無は、われわれにとっては「存在<sup>ザイン</sup>」に「属する」(id., S. 64, 邦訳、109頁)とも述べられている。存在<sup>ザイン</sup>、すなわち、有と無は意味としては、本来、対立していて相容れない関係においてある。無は、端的に、何も「無」いという事態を指し示している。しかし、ハイデガーは「無は、考えられたもの、そして、言われたものとして、やはり何がしか「ある」ist」のである」(id., S. 830, 邦訳、56頁)と何がしかの働きをしていて、また、何もものでもないものではない限りにおいて「有る」と言うのである。ここにおいてハイデガーは無を

有に対立するものとして、しかし同時に有として性格づけるという矛盾を犯しているように思われる。

ハイデガーが性起において出現するものを「現前するもの」、「現前すること」として性格づけ、二つの項をともに現在という時点に含めながら、他方では、両者の性格に違いを認めていることは前述した。「現前するもの」は未だ出現していないという意味で無としてあり、それと対照してみれば有としてある「現前すること」とは区別される。したがって、ハイデガーは「現在」に有と無という相反するものを共在せしめているのではあるが、「現前するもの」と「現前すること」を時系列に沿って出現せしめているのであり、もし「現在」に時間的延長という性質があるなら、その理論は無矛盾であり、合理的な節理のうちにあると結論される。存在は不可視でありつつ性起するという現象が真であるとして、無と有が対立しつつ、なおかつ協働するという理論はその関係性においては整合性がある。

## 結語

「<sup>ヴォルト</sup>語は、ほかの事物に<sup>ザイン</sup>存在を送り届ける」(US., S. 192, 邦訳、230頁)と語ったように、ハイデガーは性起という働きの根拠の一つを言葉に置いた。経験世界に存在する事物、そこで起こる事象に割り当てられた言葉、たとえば、机、椅子、晴れる、落ちる、動く、食べるといったような語句や述定はすべて「有る」を帶有している。その意味で「有る」はすべての事象を可能にする根源(語)と言えるだろう。しかし、有るということそれ自体は、まさに事態の本質であるという性格によってすべての現象の背後にあって不可視に留まる。具象は言わば現象にすぎない、もしくは、感覚的刺激以上のものではないと言うことも可能であることを鑑みると、確固たる「<sup>ザイン</sup>存在」とは果たして何であるのか、「有る」ということの実相は謎のままに留まる。ハイデガーは『形而上学とは何か』の基本テーゼとして「何故一体存在するものがあって、却って無ではないのか」と問う。川原栄峰氏は「<sup>イスト</sup>あるは存在者ではなく、むしろ無に属しているのではないか」(『形而上学入門』、265頁)というのが、ハイデガーが抱いた問いであるとし、彼にとって無は名詞(主語)と解されねばならないと説いている。そうした事態を性起の理論に従って表現するなら「( ) gibt etwas」<sup>15</sup>である。ハイデガーが語るように、具体的な存在者の根源に潜み、経験世界の根拠ともなる実体と呼ばれるべきものがあるとしても、それは不可視であり、具象としては「無い」。「有る」

は「無い」のである。しかし、性起という事態が真実であり、また、もし「現前するもの」と「現前すること」が互いに触れ合う刹那があるとするれば、そこでは有と無が融け合っているはずである。もしかしたら有と無は決して対立的に、別個のものとして働きあっているのではなく、同時に、しかも同じ場所で成り立っているのではないか。矛盾する事態の両立は科学的思惟においては成り立つ術がないが、世俗的矛盾を超えて矛盾が成立する事態は、たとえば、仏教思想など東洋思想にあっては決して珍しいことではない。「有る」をめぐる問題を今後はそうした視点からも論究したい。

## 註

<sup>1</sup> ロックによれば、「一般に、人は実体 substance の観念をもたず、実体がそれ自体において何なのか、知らない」(*An essay concerning human understanding I, everyman's library, London, 1974, p. 325*) し、また、我々にそれが何であるか知らないという不確かな暗示以外のものを与えないと述べている (p. 53)。経験主義者にとって実体とは知ることではできないが、否定しきれないものである。

<sup>2</sup> ハイデガーは経験的世界の具体的な存在を存在者 *Seiendes* と呼び、それを有らしめている根柢的なものを存在 *Sein* として存在者から区別した。存在者と存在の間には存在論的な差異があり区別されるが、しかし無関係ではなく、むしろ存在は存在者の原理として欠かせない関係にある。

<sup>3</sup> 現存在 *Dasein* とは存在がそこ <sup>デザイン</sup> *da* に開示されるものとしてある人間のこと。

<sup>4</sup> 無は、存在者としてではないが、存在者に属するものとして存在者とともに現存在に不安を与えつつ生じる。無の本質は現存在を存在者そのものの現前にもたらすことのうちに存している (vgl., *Was ist Metaphysik?*, Verlag von Friedrich Cohen in Bonn, 1930, S. 19–20, 邦訳、52–54 頁参照)。

<sup>5</sup> 「現前すること *Anwesen* は現前するもの *Anwesende* を、すなわち現在のなもの *gegenwärtige* と非現前的なもの *ungegenwärtige* とを、不伏蔵態の中に保護する」(*Holzwege*, S., 321, 邦訳、389 頁)。「現在の現前しているものは、それが非現在のものの中に自らを所属させる限りにおいて、現在のなのである」(id., S. 329, 邦訳、400 頁)。

<sup>6</sup> *jeweilig* は辞書 *Duden* では、*zu einer bestimmten Zeit gerade bestehend*, すなわち、暫くの時間延長を持つという意をもつ語であるとされている。

<sup>7</sup> 「*Ort* (場所) という名辞は、根源的に槍の先端を意味していて、そこはすべてが集う場所である」(US., S. 37, 邦訳、35 頁)。

<sup>8</sup> 「言 <sup>ザーグ</sup> とは、示すこと、現出 *Erscheinen* せしめること、光を与え、自らは隠れ、解放しながら世界を譲り渡すこと、である。」(US., S. 214, 邦訳、260 頁)。

<sup>9</sup> 「性起は言の構図を収集し、その構図を展開しつつ、多様な仕方で示すという構成へと展開せしめる」(US., S. 259, 邦訳、320 頁)。

<sup>10</sup> ハイデガーは「言葉 *Sprache* とは、現前 (すること) *Anwesen* と現前するもの *Anwesendem* という二重性へと人間が解釈しながらかわるときに基本となるものである」(US., S. 125, 邦訳、147 頁) と述べている。ハイデガーに即して考えるなら、現前するものがまさに現前しようとするとき、それは静寂の響きとなって顕れる。

<sup>11</sup> *Es gibt* で「～がある」の意であるが、直訳すれば「*Es* が～を与える」である。

<sup>12</sup> 「その場合、すべての《*Es ist*》からの分離が生じます」(US., S. 154, 邦訳、187 頁)。*Es ist*...

は「それは・・・である」の意。

13 その意味で最も多くの意味を現在という枠組みにおいて生き生きと生起せしめる隠喩は「沈黙」である。

14 「現れること、隠れ消えてゆくことすべてが、示すという働きをもつ言<sup>ザーグ</sup>に依拠している」  
(US., S. 257, 邦訳、318 頁)

15 文法的には成立しないが、「( ) は何がしかを与える」の意。

(さとう・こうぞう 無所属)